Ｚ会進学教室　葛西通信　３月号

葛西教室に通う本科生の皆さんは、以下の四点を心がけるようにしましょう。

1　進学塾に通う中学生としての自覚を持つこと。
2　信頼の土台となるあいさつをきちんとすること。
3　書くことを大切にし、ノートをしっかりとること。
4　自習室を上手に利用し、自分で考えてもわからないことは遠慮なく先生に質問すること。

葛西教室より

葛西教室の先生の声をお伝えします。

「冴えない教務の旅立ちかた」

教務スタッフ　荒井成人

いつも通り

8両目の4番目のドア。私が乗る車両、場所が変わることはほとんどない。ここから乗れば、仕事場の駅に着いた時に目の前に階段が現れるからだ。車両や場所も変わらない。乗る電車だって何か用事があって早く行かなければならない日を除けば、毎日同じだ。自分の性格からして、いつも通りのほうが安心する。6年も通えばわかってくることはたくさんある。今日もいつもの電車のいつもの場所から、いつもの駅へと向かう。このルーティンが続くのも、あとわずか。ドアが閉まる。

いくらコロナ禍といえど、朝夕は今でも通勤ラッシュで激しく混み合う路線だが、真昼間は座る場所も選び放題だ。イヤホンで外界をシャットアウトし、好きな音楽を再生する。鞄に入れてきた漫画に合う音楽を選ぶのもまた、いつもと変わらないルーティン。長い通勤時間に欠かせない相棒たち。私を暫し、現実世界から連れ出してくれる。家から仕事場まではおよそ1時間。結局近くに引っ越すこともなく、6年間この通勤時間を継続してしまった。そもそも今の仕事場で働くことが最初からわかっていれば、近くの物件を探していたはずだ。東京の西のほうで働きますよと言われたから西に邸をなしたが、やっぱり東にしますとさらっと変えられてしまうあたり、なるほど俗に言うサラリーマンというのは、「企業には逆らえず飲み会で憂さを晴らす生き物」になっていくのだなと妙に納得してしまう。私は酒がからっきしなので、たまに会う友人に通勤時間の長さを問われた際に、よくぞ聞いてくれたと感謝を込めて愚痴らせてもらうくらいだ。今となれば、この通勤時間が私の精神衛生を整え、浄化し、充電する時間となっている。これがない生活は、考えられない。ここからは地下だ。

文化大革命

社会人一年目がそこそこに昔のように思えてくる。見知らぬ土地での一人暮らしと共に始まった。自分の今までの人生、人格、キャリアはすべて破壊、否定されることになった。22年という短い人生ながら、それなりに自分の歴史を築き上げ、それなりに上手く生きてきたはずだ。学生から一社会人という歯車に加わった自分に、世間はあまりにも残酷だった。こうすれば良いのではという考えが、まったく通用しない。大学までは上手くいったのに、だ。配属されたのは、自分が働いてみたかった部署だ。見事希望が叶えられたのだ。意気揚々と仕事に取り掛かるのだ。そうじゃないよと苦笑いされながら、山のように間違いを指摘されるのだ。上司との面談で「学生の頃のコミュニケーション能力と、社会人のコミニュケーション能力は全然違うのよ」と諭されたことがある。学生気分が抜けていないやつだと、遠回しに伝えてきたのかもしれない。

上司や先輩たちの言葉や態度から、「この問題児をどう扱っていこうか」と悩んでいる姿が想像できてしまった。溢れ出てくるのが、わかる。変な所に敏感な私には、わかってしまった。被害妄想と何ら変わらない。そして、叱責されることはない。みんな優しく説明し、私に気を遣って、仕事のできない一年目社員をなんとか使い物にしなければと目をかけてくれている。優しさが伝わってくるからこそ、期待に応えられない自分の無能さが本当に苦しかった。まわりの同期達は上手くやっている。隣の芝生は青く見えるのかもしれないが、色眼鏡を使ったとしても、見えるものは見えてしまうのだ。夜は22時には布団に入っていた。やることがないのだ。明日の仕事のことばかり考え、身体を休めなければと思うと、とにかく生活リズムを正しくしようという気持ちが働く。7時起きの予定が、5時に、6時に目が覚める。遅刻なんてもっての他。これ以上自分の評価を下げたら、どうする。夏は自分の好きなアニメの曲を大音量でかけながらスーツに着替えた。今でも忘れることはない。夏の終わりを彷彿とさせる詩。現実世界をどこまでも高く超えていくような、鳥が羽ばたいていく詩だ。そうでもしないと、社会人のスーツを着ることができなかった。そしていつの間にか、会社に行く前、アパートの前の小さな神社に手を合わせるようになった。『今日も一日頑張りますから、どうか私を見守っていてください。』ただ一言、辛かった。熱帯夜の夜に、実家に電話をかけたことがある。蚊に刺されやすい体質のくせに、半袖のまま、木が生い茂る神社で電話をかけた。それでもここに来れば、いくぶん落ち着いた気さえした。この辛さを乗り越えるためなら、まわりの目なんて気にしていられない。「最初はみんなそんなもんだから大丈夫」なんて、わかりきった励ましの提携文が電話口から聞こえてくる。無能な自分の頭でだって、そんなことわかっている。そんなわかりきったことでも、他人から、親から言われると、涙が止まらなかった。

時を同じく、季節が逆転する異国でどん底にあえぐ人間がいた。よくわからない理由でホームステイ先を追い出され、家無し生活を強いられたこともある。働いていた学校で契約に反する仕事をさせられ、意見しても「日本人の小娘の戯言」程度にしか受け取られ、泣き寝入りするしかなかったこともあったという。サバイバル。その日ぐらし。無事に生活できる保証はまったくない。たまに来る連絡、いや、生存確認の一報にいちいち安堵した。そしていつの頃からか、手を合わせる時、主語は「私」ではなく「私達」に変わった。今となっての話だが、それが本人は嬉しかったらしい。気づけば母校の学生がまわりに多い。

逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ

一年目の秋頃、私はとある専門学校の説明会に行った。それは小さい頃から憧れていた職業を目指せる学校だった。自分が辛いのは本当にやりたいことができていなから。恥ずかしい現実逃避をかっ下げて、私は地方から久しぶりに東京へ戻り、話を聞きに行った。このモヤモヤを、この苦しみを、なんとかするために。なんとかする行動力だけはかろうじて残っていた。現状を包み隠さず担当者の先生に話すと、意外な言葉が返ってきた。

「例えこの学校に入ったとしても、目指す職業に就けるのか、その保証はない。年齢的にも厳しい。そして何より、君の最終学歴が『専門学校卒業』になる。その覚悟はあるのか。君の大学を見ると、正直それはおすすめできない。」

当たり前だが、専門学校も利益を求めているので、入りたいと考えている人には入ってもらった方がお金になるはずだ。利益になるであろうカモを目の前に、その先生はカモを逃す選択を取った。専門学校生としての専門性を武器にするのではなく、社会人としての経験を武器にすることを私に勧めてくれたのだ。

私の中で、明確な目標ができた。とにかく食らいつけ。せっかくやりたかった部署に配属されたのだから、慣れれば、突き詰めれば、時間が経てば、自分が入社する時に思い描いていた社会人に少しでも近づくことができるかもしれない。もうすぐ後輩も入ってくる。二年目はきっと今年よりは。

そして二年目。私は異動になり、東京へ。塾部門…まったくもって想定外の部署へ行くことになったのだった。待て待て、一年目の葛藤を返してくれ。漫画だったらせめて、二年目三年目の戦いや成長を経て新たなステージへ…みたいな流れが定石じゃないのか。読者を混乱させるな作者よ。そうか…今の部署では戦力外通告ということなのか。どうせなら明確な答えが欲しい。自問自答は届くことなく、塾での生活が始まった。ちょうど大きな玉ねぎの下。

田舎のネズミと都会のネズミ

22時に寝ていた生活から、22時に仕事が終わる生活に変わった。東京の子供達は22時まで勉強して、電車で塾に通って、日曜の朝からテストで塾に来るのかと、心の底から驚いた。近所の塾に自転車で通い、土日は部活で一日対外試合に明け暮れていた自分の中学生時代を重ねると、東京の塾、いや、東京に住む中学生ってすごいと本気で感心した。それは今でも変わることはない。テキストを見ても、自分が中学生の時にこんな問題解けただろうかと考えてしまう。そもそもこんなに勉強ができる環境ではなかったし、まわりもそんな空気ではなかった。

電車で中心地まで塾に通う人は皆無だった。むしろ「電車で塾に通うやつ（笑）」そんな扱いだった。大都市は違う。塾に通わない方が（笑）なのだ。すごい世界だ。Z会なんて難しい教材を使っているイメージは親の世代ほど浸透している。中学生諸君、いつか君たちにもわかる時がくるだろう。すごい塾に通っていたということに。

以前長野の親戚の叔母と電話で話したことがある。ちょうど年末年始の時期だ。塾は31日まであるよ、年明けは2日からだよという話をした。「東京の子は大変ねぇ、そんなに勉強して。かわいそう。」悪気があって言った言葉ではない。素でそう思ったのだろう。今まで生きてきた中で、小学校や中学校から塾に通わせる、ましてや年末年始も勉強させる塾、家庭、環境がなかった叔母からしてみれば、異常な光景に映るのだろう。もちろんこれは逆もありえるから、一概にどれが正しいのかはわかったものではない。毎日新聞を読む人もいれば、読まない人もいるのだから。

モデルはあくまでモデルであって

自分なりに思うこと。機会があるなら得て損はないということだ。知は我が身を助けてくれる。覚えた知識がそのまま役に立つということではない。覚えるまでにした努力、学習方法、考え方、思考力…こういった経験が、やがて生きる力として力を発揮する。悲しいことに、勉強しておけば良かったと後悔するのは、決まって「勉強をしなくてはならない」学生の頃ではなく、「勉強をしなくて良い」社会人になってからである。そんな大人が大半なはずなのに「勉強しなさい」と口酸っぱく言われるのは何となく理不尽な気もするし、少しだけ学生達に同情してしまう。それだけ大人達の後悔は大きいのかもしれない。そして私も、その理不尽な大人の一人である。しておいて損はない。せっかくなので、伝えておきたいことをつらつらと。

中学一年生。まず、中学校の生活に慣れ、体力をつけることが大切だ。特に部活が忙しい人は尚更だ。勉強量は小学校時代に比べて格段に増える。学校生活に早く慣れて、生活のサイクルを確立させたい。Z会は他の塾に比べてレベルは間違いなく高めなほうだ。普通の中学一年生のレベルではない。

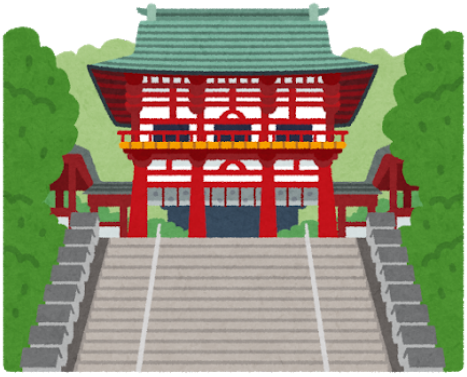
まずは先生の言うことを聞き、メモを取り、実践することが何よりも大切になる。言われたことがきっちりできるようになれば、それだけでまわりの生徒達とは頭一つ抜けることができる。

中学二年生。中学校生活にも慣れてある程度余裕ができる。中弛みなんて言葉が学校の先生から耳にタコができるくらい聞かされる学年だ。二年生になって最も大きな出来事は、後輩が入ってくることだ。不思議なことに、中学一年生の頃はあんなにやんちゃで授業中も騒がしかった生徒が、二年生になると途端に授業中もしゃべらず黙々と机に向かうようになるのである。これは毎年見ることができる。非常に興味深い。はっきりした理由はわからないが、「先輩」と呼ばれるようになる日本の中学校の古き良き、いや悪しき？伝統は、14歳の精神年齢を上げる役割を少なからず担っているのかもしれない。テキストを見てみる。Z会の中学二年生のテキストは、難しい。自分が中学生の頃は間違いなく歯が立たなかっただろう。真剣に勉強に向き合わないとあっという間に置いていかれるし、授業をしっかり聞いて復習しないとちんぷんかんぷんになるのだろうなと感じ取れる。なるほど、後輩には恥ずかしい姿を見せるわけにはいかないし、真面目に授業を聞かないと本気でわからなくなるのかな。

中学三年生。いよいよ受験生だ。最も求められるのは自主性だ。ただ塾に来て授業を受けて家に帰ったら宿題をやって、だけでは受験生にはなれない。そこに加えて「今自分が何をするべきか見極める力」が必要だ。教えてもらいに塾に来る、という考えは持たないほうが良い。数学の授業が難しい、他の科目以上に時間をかけて復習ないし予習をしてみよう。英語の単語は知っているし書けるけど長文がうまく読めない。もしかして文法の理解が浅いのかもしれないから二年生の単元に戻ってみよう。例えばこのように考えて行動に移すことができるだろうか。一人で考えるのが難しいなら先生に相談ができるだろうか。「ここが上手くわからないから教えてくれ」から始めても良いだろう。「国語の読解がうまくいかない、どこに気をつけて読めば良いのかアドバイスがほしい」など具体的な悩みを話せば、先生も具体的なアドバイスをくれるだろう。先生も人間だ。本気で成績をあげたいと考えている人にはそれなりの手助けをしてくれる。楽してアドバイスだけもらおうとすれば、それなりの報いも待っているかもしれない。本気を出すことを恥ずかしいと思う気持ちもあるだろう。

「”青春全部かけたって強くなれない”？まつげくん。懸けてから言いなさい。」

TSUTAYAで借りてきて、妻と一緒になって読み耽っている漫画「ちはやふる」の有名な一説だ。あいつには才能があるから、百人一首においては自分は勝てない。こんなことを言った生徒に対し、師匠の原田秀雄が返した言葉。どう考えて行動するかは、あとは諸君次第だ。



教務という立場上、勉強を教えることはできない。でも勉強以外なら…。私が嫌われてでも何度も伝え続けたことは、提出物を管理しなさいということだった。中学三年生になると、提出してもらう書類が格段に増える。渡す時に提出〆切を見てもらい、この日までに必ず提出することを確認してもらう。

「親御さんに渡せば終わりじゃないよ。親御さんだって忙しいんだから自分で管理しないと。忘れてそうだったら『この前渡した紙、そろそろ出さなきゃいけないんだけど』くらい言って助けてあげなさい。」

提出状況を確認して出ていない生徒には直接声をかけにいった。またこの子が出していないのか…と思うことは多々あったし、みんなも「うわ…また呼び止められた…」と感じていたかもしれない。『困るのは君だし親御さんだし、僕らにも良いことはない』と考えれば、呼び止める声が減ることはなかった。提出物を忘れる、期限を守らないという行動で、良い方向に動いた事例を私は聞いたことがない。ぎゃーぎゃー私に言われる前に、無意識に守ることができる癖をつけてほしい。おそらく高校に行くと、そういうこと言う人は減るはずだ。なぜなら「守るのは当たり前。守らないやつは知らない」となるからだ。義務教育ではない高校は、来る気がないなら来なくて良いが通用する世界だ。肝に銘じておくべきだろう。そうそうここは、東と西で読み方が違う。

凡人を知る

当たり前だが、私にも中学生、高校生の時代があった。自分で言うのもなんだが、私はいわゆる優等生と言われる部類だった。中学の頃の定期試験は一桁の順位しか取ったことがない。学級委員をやらなかった学年はなかったし、所属していた野球部では部長を務めた。生徒会長をやったらどうだと先生から勧められたこともあったが、絶対に面倒くさいなと察して「野球部が忙しいから無理」とそれらしい理由をつけて断った。そして高校入試。都立でいうところの推薦入試みたいな、まあ回りもみんな出願するからするけど一般入試で頑張るからとりあえず受けるだけ受けるかみたいな入試を受け、倍率8.25倍を突破してしまい、あまり合格した実感もなく気づいたら高校生になっていた。行きたい学校ではあったが、なんで受かったのかもわからぬまま入学し、地方の進学校という言ってみれば県内のトップ連中が集まる進学校に放り込まれた。そして入学早々の「新入生歓迎テスト」という歓迎という意味を広辞苑開いて調べてこいとツッコミを入れたくなるような非常識な試験で、自分は見たこともない点数と順位を取った。中学校の頃のようにはいかないことはわかっていたけど、ここまでなのかと打ちひしがれた。所詮自分は、井の中の蛙大海を知らず、といったところだったのだろう。自分は「この学校ではできない部類に入るのだ

な」と理解し、平均点を超えればラッキーくらいのニュアンスで勉強をし、学校生活を過ごすこととなった。それでも数学の確率とベクトルで再試験を食らったが。

とくに英語と数学は予習と宿題で手一杯だった。お前らは頭が良いんだから、これくらいの説明で理解できるだろうし、予習と復習でなんとかなるだろうの精神で授業をやっていたんじゃないか先生達よと、今になって思い出される。塾でたくさんの課題を解いている時は楽しかった。適した餌が撒かれてそれをどれだけ早く食べるか、という環境だったから。高校に入り、自分で餌を作って食べなさいという環境になった途端、自分は手も足も出ないことに気づいた。自学力がなかった。高校に合格する力はついたが、自分で学ぶ力はついていなかったのだ。自分で勉強しようとした時に気づいた。ああ、自分は勉強をさせられていたのだな、と。みちしるべのない高校の勉強内容は私にとってはあまりにも難しすぎた。塾や予備校も考えたが、地方進学校特有の怪呪文「塾や予備校に頼らずに現役合格を目指す」を忠実に守ってしまったエセ優等生は、終ぞ高校生活において外の世界へ出ることはなかった。

塾で働いて、そして葛西教室で行われている高校生の授業を見ていて、しみじみ思う。やっぱり高校の時にも塾や予備校に行ってみたかったな、と。今でも後悔している。もしもあの頃、外の世界へ飛び出す勇気があったら、自分の高校生活も志望大学も実際に受験する大学も合格する大学も何もかも、がらっと変わっていたかもしれない。結果論だけ見れば、塾や予備校に行かなかった自分ではあったが、世間から見ればそれなりに名の知れた大学に受かってしまった。余計なお金をかけずに受かるなんて親孝行ね、なんて褒め言葉なのか嫌味なのかわからない言葉も誰かにかけられた記憶もある。合格するだけの勉強は、後々の人生にむず痒い後悔を残すこととなった。

新しく高校一年生になる生徒諸君へ告ぐ。悪いことは言わないから塾や予備校は探しておいたほうが良い。高校のクラスがある葛西教室は本当に恵まれていると思う。自分が中学の頃に通っていた塾はそれがなかったから、そもそも塾や予備校を考える術も不足していた。都内にも教室はあるから、葛西に拘らなくても良いので、真面目に検討してみることを願うばかりである。大半の生徒は、私のように壁にぶち当たるはずだ。餅は餅屋。自分は何かに困った時、意外とこの言葉を信用するようにしている。大人になってから、少しだけありがたみを感じるようになったからだ。そして高校二年生、三年生の諸君。もう一年経ってしまった、そう思わないか？私がこれまでの人生を振り返った時に最も早かったと感じたのは、高校生活だった。その代わりに、密度の濃さは他の時期のどこにも負けない。部活の思い出半分、勉強の忙しさ半分といったところだ。大学受験は辛かったが、最も勉強した時期はあの頃以外はまだない。そしてこれからもないだろう。勉強だけをする時間は、これから先訪れることはきっとない。勉強は学生の特権、という大人が作り出したフレーズ。さっきも話したが、これは信じてみても良いのかなと、ペーペーの大人１は思うのだった。そろそろ眠気が限界に達する。

裏表のない素敵な仮面優等生

よく夢を見る。生徒が次々に塾を辞める。保護者の方からものすごいクレームが入ってくる。授業をするはずの先生が来ない。先生が怒って授業をやめてしまった。

人は、職業上起こりたくない出来事を夢で見てしまうものらしい。例えば料理人は、提供した料理をお客さんに出したら食中毒が出たとか。パイロットは、操縦不能に陥った機体が墜落するとか。自分もそれだけ今の仕事にそれなりの思い入れがあって、日々を生きているつもりだ。昔はあまり見ることのなかった仕事の夢を、今は頻繁に見るようになった。夢と現実の区別がつかなくなっている私へ、何を伝えているのだろう。

私はドラマを見るのが苦手だ。感情移入しすぎてしまい、俳優や女優達が辛そうにしていたり苦しそうにしていたりする展開を見ていられないのだ。怒られている姿や喧嘩している姿も、自分と重ね合わせてしまい、気持ちが憂鬱になる。ドラマが好きな妻が、面白いから見ようと誘ってきても、頭を深く下げてごめんなさいをする。これは今でもなかなか相容れない。漫画やアニメは良いのだ。現実世界ではないから。

私の母は不自由なく自分のことを育ててくれた。今の自分があるのは母のおかげであり、感謝はしている。ただ一つ、昔から感情の起伏が激しい人だった。機嫌が悪い時は言葉遣いがキツく、嫌味は止まらず、大袈裟にため息をついたり、ドアを強く閉めるなど、小さい頃はビクビクし、大きくなると「また機嫌悪いよ…」と呆れていた。自分が怒られるようなことをして機嫌が悪いならまだ我慢はできた。厄介なのは、機嫌が悪い理由がわからない時、または他人のせいで機嫌が悪くなる時だ。自分は悪くないのにどうして。母の機嫌を直す方法は2つ。時が流れるのを待つこと。そしてもう1つ、機嫌が良くなるような行動をすること。母によって築かされた性格。私の優等生気質は、こうして生まれた。

相手の機嫌が悪くならないように行動する。私に怒ってくる相手は同い年の友人ではなく、大人だ。そして学校において、私は先生から大変喜ばれる、都合の良い生徒になった。忘れ物はしない。宿題もきちんとする。先生の話は聞く。騒がない。廊下は走らない。授業で誰も手を上げなければ、自分が答えれば良い。中学の思春期真っ只中の頃なんて、進んで発言する生徒は稀だった。学級委員なんて誰がやるかというオーラが委員会決めで立ち込めていた。自分がやらない時は、前々からあたりをつけておき、学級委員やってみたらどうよと後押しすることもあった。物事を順調に動かすため。先生が、大人が困らないようにするため。そして、怒られないようにするため。

もちろん一部同級生からは煙たがられる。こんなことも言われた。「ご機嫌取り」と。小学5年生の時、一度取っ組み合いの大喧嘩に発展したこともあった。朝礼があるから時間までに外に出なくてはいけないのに、残っているクラスメイトがいる。早く行こうと促すと、「なんだよ、良い子ぶっちゃって」と喧嘩腰の言葉が返ってきた。そいつはいわゆるやんちゃな奴で、私とは水と油のような

存在だった。早く行かないとみんなが、そして注意したお前が怒られるから言ったのに、なぜ自分が責められる。悔しさが大半を占める感情の中に、「ご機嫌取り」「良い子ぶる」という図星を突かれた苛立ちが、自分を爆発させてしまったのかなと、今振り返れば思うのである。

そして私はHSP（Highly Sensitive Person）の特性を強く持つタイプの人間であると診断された。「とても繊細な人」と訳される言葉で、ちょっとの音や光、臭いにも過敏に反応してしまったり、感情移入が強すぎて喜怒哀楽が大きくなったり、人が怒られていると自分が怒られているような気持ちになって落ち込んでしまったり、色んなパターンがあるという。繊細なんて言葉、縁遠いタイプの人間だと考えていた自分には俄かに信じられなかったが、話を聞けば聞くほど、自分に当てはまりすぎて逆に怖くなった。完璧な人間などおらず、私もまた、一人の弱い人間であることに気付かされる。

車輪の唄と気の利かないブレーキで、不意に現実に連れ戻された。

変なことを思い出す夢だった。まわりを見渡す。「憧れの3LDKマンション！東京駅から○○線で20分の好立地！」音のない商業広告の隣に駅名が表示される。そろそろ起きないと寝過ごしてしまう。

アコガレ

憧れという言葉にマイナスのイメージを持つ人は少ないだろう。童は子どもの意味、りっしんべんは心の意味を持つ。なるほど子どもが持つ思いといった意味かな。大人になるほど、憧れの字は薄らいでいく、そんな漢字と理解する。大人の世界の憧れ。商業要素が詰まるとこんなにも陳腐な言葉に見えてしまうのは、私のひねくれた心のせいなのだろうか。

あの高校に憧れて、あの大学に憧れて、勉強を頑張っています。仕事柄最もよく聞く用法はこんな文章だ。あとはどうだろう、サッカー部の○○先輩に憧れていて、あー私とお付き合いできればなぁなどというこんなの所詮少女漫画でしかない設定だろうと嘲笑っていたら高校に行って想像以上にそういう女子がいて面食らった私の思い出に登場するくらいか。そしてなんだかんだ強がるくせに結局まわりに流されやすい典型的な日本人気質だなお前はと言われてしまう私は、実年齢より年下の先輩に憧れを持つようになる。こんな先輩と仲良くできたら絶対に楽しいし惚れるよなぁと。片想いの妄想ほど楽しく、そして楽で、無責任でいられることはない。すべては空想の妄想の世界。結局その先輩は私の前に現れることなく、私との年齢も、気づけば一回り分離れてしまった。ああ無常。ただひたすらに無常である。彼女の世界には、憧れていた頃の私がまだいるのだろう。現実の私にはもう憧れる資格はなく、そのことに気づくくらいの常識も持ってしまった。

憧れが現実になり、その現実と憧れにギャップがあった時、絶望に近い感情を得てしまうのは必至だ。私はこの憧れを現実にするために死に物狂いで努力をしてきた、そしてやっと現実になった、そして現実はこれなのか？本

当にこれなのか？誰かが囁く。そらみろ、憧れは憧れらしく、憧れで終わらせておけばお前は幸せだったのだ、と。

思い描いていた華の高校生活、予習と復習だけで手一杯、まったく楽しくない。高度な学問を学べると思った大学生活、まわりは代返とサボりばかり、バイトに明け暮れて顔を見せないくせにテストの直前でノートに集って単位を取っていく輩、こんな不公平ばかり。憧れていた先輩は良いのは見た目だけ、話は面白くない、ラインを送ってもそっけない返事ばかり、デートに誘おうとしても部活が忙しいし終わったら男友達と遊ぶから時間がないって、もう、こんな人だったのね！

それでも人は、憧れを現実にする努力、行動を止めようとしない。自分だけはそうならないと信じているからだ。そしてギャップに苦しみ散っていく多数の人間はピックアップされることはなく、成功した人間が表舞台で光を浴びることばかりに注目が集まるから、憧れを持つ人は減ることない。いつまでも負の連鎖は続くのだ。『傷つく可能性が高いのにそこに飛び込むなんて、あなた本当に馬鹿ね。』主人公の恋敵が言いそうなセリフが思い浮かぶ。そして私は、頭の切れる恋敵ではなく、恋に恋してわき目も触れず突っ走る主人公になってしまうのだった。急勾配を一気に駆け上がる。西に比べて東のほうは雲が晴天のようだ。太陽光線が目に染みる。

好きこそ物の上手なれ？

絵が好きな人が全員漫画家に、画家にならないように、音が好きな人が全員歌手に、演奏家にならないように、ゲームが好きな人が全員ゲーマーに、ゲームクリエイターにならないように、勉強が好きな人が全員学者にはならない。敢えて好きなものは仕事にせずに趣味に留めておく人は圧倒的に多い。お金を稼ぐということは想像以上に大変なことだ。ゲームをすることは好きだし楽しいという人はいくらでもいる。では、人を楽しませるゲームを作り出すことが、全てのゲーム好きにできるかといったら、イエスという回答がすぐに出るだろうか。必ずしもそうではないはずだ。スポーツを職業にすることはさらにシビアだ。好き以上に、実力を求められる。技術が乏しければプロのスポーツ選手にはなれない。芸術もそう。漫画が売れなければ漫画家として生活はできないし、絵が売れなければその日食べるご飯も買うことができないかもしれない。芸大、音大などは受験生に身近で、案外考えたことのある人もいるのではないか。大成するのは一部。そもそもその道で大成したいと本気で考えて進学する人も、そんなに多くはない。大成するかどうかは、本人のやる気以上に、実力であり、才能だからだ。現実は残酷だ。好きなものを職業にしたつもりが、生活するための「強制」になり、やらなければならない「義務」になる。確かにあったはずだ。憧れていた時期が。大の大人が、憧れを追いかけるのは間違っているのか。否定してくれるのは、自分自身だ。鉄橋を渡る時のジョイント音は私を励ますBGMになってくれた。

DREAM SOLISTER

私は今、非日常と表示された車両の一角に腰を落としている。ドアが閉まるまで、まだ少し猶予があるそうだ。いつもと変わらない日常がドアの向こうに待っている。人生は選択の連続だ。高校を卒業する諸君。これからはこういうことばかりだ。小中高と奪われ続けた「自由」が突然手に入るが、「責任」とセットになっていて、これを拒むことは許されない。自由の使い方がわからないだろう、とりあえず使ってみて慣れるしかない。責任は身をもって覚えよう。最初は怖いかもしれないが、案外居心地は悪くない。困った時は諸君が手にした「知」が自分を守ってくれるはず。

「 自分の信じる通り、やってごらん。でもな、人と違う生き方はそれなりにしんどいぞ。何が起きても誰のせいにもできないからね。」

スタジオジブリの映画『耳をすませば』のワンシーン、いつどこで聞いたかは覚えていないのに、この言葉だけは今でも胸に刻まれている。人と同じ生き方だってしんどい時はあるのに、違う場合の苦労は自分にしかわからない。中学生という若輩者の主人公に対し、優しさと厳しさを合わせ持った主人公の父親の言葉は、やっぱりそういうハッピーエンドになるよねという作品全体の展開よりも強く印象に残った。

一年目に専門学校に突撃してから幾年。奇しくも不思議なアドバイスをくれた先生の話通りに事が進んだ。あれだけわーわー強がっておきながら、結局私は夢を、憧れを、諦めきれなかった。正直もう諦めていたし、憧れだけで終わらせても良いと思った。社会人になった時、ああ自分には縁のなかった職業だったと思うことにした。しかし、いくつものきっかけが重なり、私は憧れの職業につくチャンスを得た。回り道であっても、叶えることができることを知った。万人が目指すことではないだろうし、私のこの選択が正しかったかは今はわからない。今回の私自身の選択も、悩みに悩んだ。いくら大人は自由と言っても、私の一つの選択に対してもろに影響を受ける人が隣にいる。何度も相談を重ねた。今より大変な生活になる可能性だって高い。そこをわかった上での今回の決断だ。「私も今までやりたいことをやらせてもらった。やりたいことができない苦しみは私もわかってしまうから、あなたの選択を否定することはできない。」目を見て言ってくれた言葉ではない。私と同じく、生活の安定と夢を追う不安定な生活のジレンマに苦しんでいるはずだ。このジレンマを解消するのは、私しかいないのだ。ああそういえば、私は憧れと現実を知る機会を得てしまったことになる。そのほうが断然、面白そうじゃない！SOS団の団長なら、きっとこう言ってくれるはずだ。

葛西教室で出会った全ての方に感謝して、別れていく全ての方に涙して、私は旅立ちたいと思います。短い間ではございましたが、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。どうか皆様、お元気で。

日常へと向かうドアが閉まる。今から向かうは非日常。未来へ向けて出発進行。信号には黄色も赤色なく、空と同じ青色。他の人と同様に、私の人生もまた動き出す。例えこの選択が間違いだったとしても、後悔だけはない。

スケジュール

月	日	曜	受付時間	授業・テスト・模試など					保護者会・研究会など		
3	1	月	14 ～22								
	2	火	14 ～22								
	3	水	14 ～22								
	4	木		休室							
	5	金	14 ～22								
	6	土	9 ～22			中学準備講座 オンライン授業報告会 14:00～14:40					
	7	日	9 ～20	新中2・3 3月度②	新中1 3月度①						
	8	月	14 ～22								
	9	火	14 ～22								
	10	水	14 ～22								
	11	木		休室							
	12	金	14 ～22								
	13	土	12 ～22								
	14	日	10 ～20	新中2・3 3月度③	新中1 3月度②						
	15	月	14 ～22								
	16	火	14 ～22								
	17	水	14 ～22								
	18	木		休室							
	19	金	14 ～22								
	20	土	12 ～22								
	21	日	10 ～20	休講日					高校スタート講座 数学 15:00～17:00		
	22	月	14 ～22	休講日					高校スタート講座 英語 18:30～20:30		
	23	火	14 ～22	休講日					高校スタート講座 国語 18:30～20:30		
	24	水	14 ～22	休講日							
	25	木		休室							
	26	金	14 ～22	休講日							
	27	土	9 ～21		3K 英数国理社 講習①	2V 英数国理社 講習①	2K 英数国理社 講習①	1V 英数国 講習①			
	28	日	9 ～21		3K 英数国理社 講習②	2V 英数国理社 講習②	2K 英数国理社 講習②	1V 英数国 講習②			
	29	月	9 ～21		3K 英数国理社 講習③	2V 英数国理社 講習③	2K 英数国理社 講習③	1V 英数国 講習③			
	30	火	9 ～21		3K 英数国理社 講習④	2V 英数国理社 講習④	2K 英数国理社 講習④	1V 英数国 講習④			
	31	水		休室							
4	1	木	9 ～21		3K 英数国理社 講習⑤	2V 英数国理社 講習⑤	2K 英数国理社 講習⑤	1V 英数国 講習⑤			
	2	金	9 ～21		3K 英数国理社 講習⑥	2V 英数国理社 講習⑥	2K 英数国理社 講習⑥	1V 英数国 講習⑥			
	3	土	9 ～21		3K 確認テスト	2V 確認テスト	2K 確認テスト	1V 確認テスト			
	4	日	10 ～20	休講日							
	5	月	14 ～22	休講日							
	6	火	14 ～22	休講日							
	7	水	14 ～22	休講日							
	8	木	14 ～22	休室							
	9	金	14 ～22	休講日							
	10	土	12 ～22	休講日							
	11	日	10 ～20	4月度①							

Z会の教室
Z会進学教室　葛西教室
〒134-0084　江戸川区東葛西 6-2-3　第三須三ビル 6 階　TEL03-5878-0844

受付時間　平日 14：00～22：00　　日曜日・講習中 10：00～20：00

『葛西通信』の記事（バックナンバー）は Web からもご覧いただけます。　Z会 葛西 検索